Osaka University Knowledge Archive

Title	世界「痴漢」発見
Author(s)	岩井, 茂樹
Citation	日本語・日本文化. 2017, 44, p. 31-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60422
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

〈研究論文〉

世界「痴漢」発見

岩井　茂樹

はじめに

ある日のことである。留学生がこんな質問をしてきた。「なぜ、日本では痴漢が多いのですか」と。筆者もタイの大学で教えている時、何度もこうした質問を受けたことがある。だが、その時は「なぜだろうね〜。電車が混雑するからかな〜」といった曖昧な答えしかできなかった。こうした質問を留学生から受けた経験を持つ人は少なくないはずだ。

もう一つ、不思議なことがある。日本では駅や電車内、学校の通学路などで「痴漢」防止に関するポスターやステッカーをよく見かける。ラッシュ時などに車内アナウンスが流れることもある。こうした広告や警告といった類のものを、少なくとも筆者は、海外で見たり、聞いたりしたことがない。これはどうしてだろう。

「痴漢」はもともと、「愚かな男」を意味する口語の罵倒語であった。それが主に『水滸伝』などの「白話小説」や「禅語録」によって日本へと流入した。日本では会話ではなく活字を通して「痴漢」という語が認知されたため、話し言葉ではなくむしろ書き言葉として定着した。ただ、明治後期になるまでは原義通り、「愚かな男」という意味しかなかった。明治も終わりごろになるとその様相に変化が起こる。「女性にみだらな行為をする男」へとその意味が次第に変化していったのだ。我々が現在「痴漢」と聞いてイメージする意味は1950年代に完成したものであった。以上のような「痴漢」の流入と変容過程を、筆者は以前、二本の論文で発表した[1]。

だが、そこでは扱えきれなかった資料に、外国人によって行われた日本の「痴

漢」批判や批評などがある。本稿はこうした外国人が見た日本の「痴漢」について論じるものである。

こうした資料を使用し、論じる理由は二つある。一つは、異文化に属する人物からの指摘には常に自文化と比較する視点、つまり比較対照的な視座が内包されているからだ。無論、そうした指摘のすべてが正しいとは思わない。中には印象批評や偏見もあるだろう。誇張されたものも存在するかもしれない。いや、むしろそうした内容のもののほうが多いような気もする。ただ、自分の顔を見るのに鏡が必要だったり、自分がどのような人間かを知るためには他者という存在が不可欠なように、外からの視点からしかわからないこともあるだろう。

もう一つの理由は、前稿で述べた通り、「痴漢」が犯罪だと意識された背景に、海外の動向が大きく作用したという事情があるからだ。具体的には、1985 年にナイロビで行われた「国連婦人の十年会議」に伴って制定された「男女雇用機会均等法」と、その 10 年後に北京で行われた「第 4 回世界女性会議」である。明治時代以降、日本は世界的な女性差別撤廃運動の影響を強く受けてきた。また多くの日本人が、外国人たちによって書かれた、いわゆる「日本人論」に感化され、それを内面化してきたところがある。そうした経緯があるからだ。

本稿は、こうした問題意識と方法に基づき、外国人が見た日本の「痴漢」に対する言説を分析対象として、その特徴と、言説が生成された時代の社会的背景を明らかにすることを目的とする。より具体的には、以下に挙げた①～③について明らかにするものである。

①外国人が日本の「痴漢」について問題視し始めた時期
②言説の特徴と変化
③言説が生まれた主たる社会的要因

なお、本論に入る前に、本稿では煩雑さを避けるため、「痴漢」に関する言説を総じて「痴漢論」とし、引用文については読みやすさを考慮し、通用する漢字に改めたことをあらかじめ断っておく。

では以下、具体的に外国人たちが書き残した「痴漢論」を見ていこう。

第1章：「痴漢論」の登場

外国人によって日本の「痴漢」のことが本格的に語られるようになったのは、1960年代以降のことである。もっとも早いものの一つとして、1962年8月4日付 *The Japan Times* 紙「Readers in Council」投書欄に載った“*Bad Manners of Japanese Men*”と題された記事がある。この記事は東京に住む、Wesly K. Johnsonという男性が書いたもので、タイトル通り日本の男性たちのマナーの悪さについて述べたものだ。そこには次のような記述が見える。

> At other time I have observed men pawing women in the crowed trains
> — these women can do nothing because there are too many people and because other Japanese men cannot be bothered to lift a finger to help
> — the Japanese men are very tightly knit group publicly, a group for which I must admit I have little respect.[2]

ここでは混雑した電車の中で、男性たちが女性の体を触るのを見たが、多くの人たちがいたことと、他の男性たちが面倒くさがって助けなかったため、女性たちは何も抵抗できなかった、ということが記されている。この記事は最終的に男性に対し、女性をもっと敬うことと、公共の場で紳士になることを強く希求している。この次の週にも、再び同紙同欄に“*Damaging Male Manners*”という題された投書が見え、そこでも深刻な「痴漢」被害の実態が語られている[3]。

これらはいずれも東京に住む外国人たちの声である。こうした住民の被害が新聞に投稿され、外国人の間で次第に「痴漢」が大きな問題となっていったようだ。ただ、これらの記事に「痴漢」に相当する名詞が見られないことや、自国などと比較するような記述は見当たらない。

比較的な視点から「痴漢」を論じた早い例として、1964年に発表されたジョージ・ランバート「痴漢の天国」という文章が挙げられる。「著者紹介」によると、ランバートは1928年アメリカミネソタ州生まれのフランス系アメリカ人で、ミネソタ大学で心理学や文学を専攻した後、57年ソルボンヌ大学で修士課程を修了、同大学院で中国語と日本語を勉強し、63年に来日したという。滞日3年の

間に、テレビ英会話講師や報道番組のレギュラーとなって活躍したという人物で、日・中・仏・西・独など数カ国語を解するマルチリンガルな人物だった。

ランバートの「痴漢の天国」は次のような文章から始まる。

> 日本は、痴漢にとって世界中で一番住みよい国である。たいていの外人（ただし若く美しい女性は例外）は、この古くからある一部の日本男性のスポーツ（？）を知っていないようだ。[4]

日本という国は、「痴漢」にとって天国のようなところであるのだが、多くの外国人たちはこの国に「古くからあるスポーツ」を知らないがゆえに非常に驚くというのだ。ただし、若くて美しい女性たちだけは、古来の「スポーツ」のことをよく知っているので驚かないという。さらにランバートは「痴漢というのは、必ずしも道楽息子とか、不良タイプではなく、極く普通の男、それも中年男の場合が多い」ということも指摘している。

続いて、ランバートは、西洋と日本女性の「痴漢」比較を行う。

> 男は女の背中などを軽く叩いて、好きでたまらぬという顔をしてみせる。女の子のほうでは、もちろん、嫌悪の表情よろしく、ぐいと頭をもたげるか、“いやだわ”とかなんとかいう。しかし、見ほれられたことを内心でよろこんでいる。これがヨーロッパでみる痴漢である。日本の痴漢が“そ知らぬ顔”で怪しげなるふるまいに及ぼうとするのは全くいやらしい。[5]

もっとも大きな違いは、西洋の「痴漢」はまず相手に気があることを示すのに対し、日本の「痴漢」はそうした意思表示なしに女性にいたずらをする点だという[6]。

ランバートが指摘しているのは主に次の二点である。一つは、日本の「痴漢」は道楽息子や不良タイプではなく、普通の男性であり、とくに中年男性である場合が多いこと。もう一つは、西洋の「痴漢」は事前に女性に気があることを示すのに対し、日本の「痴漢」は何の前触れもなく「女性にみだらな行為」をすること、である。

彼が来日したのは1963年であると先に紹介した。この年は日本で「観光基本法が」制定された年である。長谷川順一郎によるとこの法は、「昭和39年のオリンピック東京大会の開催を契機に、来訪外客の増加が予想され、国民の観光に対する関心も著しく高まってきた」という中で制定されたもので、「国の観光に対する基本的政策を確立する必要が生じ」た結果、制定されたものだという[7]。

第二次世界大戦前から長年制定が検討されてきたものの、なかなか実現化しなかった観光に関する国の方針が、「観光基本法」によってようやく明確に打ち出された。それがこの1963年という年であったのだ。こうした動きの中、1961年以降、ほぼ10万人ずつ来日する外国人が増加し、東京オリンピックの開催以降、その数は毎年30万人を突破した[8]。また貞清栄子の「調査レポート」によると、当時の日本には60万人の外国人労働者がいたという[9]。

おそらくこの時期、多くの外国人が来日したことや、日本に対する関心が高まったことによって、日本の「痴漢」が外国人によって自然に認知されるようになっていったものと考えられる。

念のために付け加えておくと、これ以前から一部の外国人たちは日本の「痴漢」を知っていたものと思われる。なぜなら、明治時代から電車の混み具合はひどかったし、おそらく「痴漢」行為もあっただろう。場合によっては、外国人が目にしたこともあったかもしれない。

ただ、少なくとも言えることは、この頃まで外国人が日本の電車の混雑度について言及することはあっても、「痴漢」行為を問題視することはほとんどなかった、ということだ。理由は二つある。一つは、言葉の問題である。日本において「痴漢」が現在の意味で広く使われ始めるのは、1954年以降の「鏡子ちゃん事件」以降のことであったこと。もう一つは、日本国内においてさえ「痴漢」が個人的な問題（個人の変態的行為）から社会問題へと変化したのは「鏡子ちゃん事件」以降だったこと。こうした時代的状況から判断すると、「痴漢」のことがメディアなどで大きく取り上げられるのは、どうしても1954年以降のことになるのである。

「痴漢」が社会問題化していく傾向は小説においても確認できる。戦前の「探偵小説」などでも「痴漢」という語がよく使用されていた。ただ、そう呼ばれる

のはある異常な性格をもった個人がほとんどであった。それが戦後、たとえば三浦朱門の『セルロイドの塔』（1959 年刊）や、泉大八『アクチュアルな女』（1961 年刊）、大江健三郎『性的人間』（1963 年刊）、安部公房『他人の顔』（1964 年刊）などによって、次第に個人というよりも日本人や日本社会、さらには人間の深奥に普遍的潜む欲望の表れとして「痴漢」が描かれていくのである。

こうした条件が整って初めて、ランバートのような言説が出現することになるのである。ただ当時、こうした記事で批判されるのはほぼ男性に限られていた。

第２章：不可解な「大和なでしこ」

「痴漢」は間違いなく男性が悪い。ただその一方で、日本の女性も悪いのだ、という意見も間々見られる。それを次に紹介しておこう。

1979 年 9 月 17 日付『読売新聞』朝刊第 5 面に「日本女性は『内気』を捨てなさい」という記事が掲載されている。グロリア・ジェイン・バイロンというフィリピン留学生へのインタビュー記事である。彼女は、当時 32 歳の大学院生で、慶應義塾大学の研究生を経て、上智大学の大学院で比較文化を学んでいた学生だった。インタビュー時、彼女の日本滞在年月は 2 年 5 ヶ月。

ここでグロリアはフィリピンと日本を比較し、日本女性の「内気」な面を批判し、「もっと男性と五分に渡り合うべきです」と述べ、「『大和なでしこ』って言葉、あれは女性差別の遺物じゃないですか」と述べている。こうした流れの中で彼女は、自分の体験談を次のような口調で語っている。

> もう一つ、日本の夜は非常に安全でいいんですが、いやな経験もあります。この間、満員電車の中で中年の「チカン」にあったんです。カサで胸をドンと突いてやったら逃げて行きました。もう腹がたって腹がたって……。母国ではこんなことはありません。「比較文化」でこんなことまで体験するとは思ってもみなかったわ。[10]

彼女は満員電車で中年の「痴漢」に会った。そして「痴漢」の胸を傘で突いた。すると「痴漢」がすごすごと逃げて行ったというのだ。自分の国にはこんな人は

いないと言う。

この記事でもっとも彼女が言いたかったのは、日本女性も私のように我慢せず、はっきりとした意思表示をしないといけないということである。こうした意見は1970年代から80年代によく見られるものだ。

その一例として、1980年、『週刊明星』に載った「痴漢されて一番しとやかなのはニッポン女性」という見出しの記事がある。これは1979年のカンヌ映画祭批評家週間に上映されて大反響を巻き起こした横山博人監督の映画『純』にまつわるエピソードである。この映画は地方から集団就職で上京した純という青年を描いたものであるが、この青年は恋人には指一本触れることができないのに、朝夕の通勤電車内では「痴漢」行為を繰り返す。監督の横山によると、電車での「痴漢」シーンが特に若い女性たちの反響を呼んだという。横山は次のように言う。

> 彼女たちにいわせると「日本の女性は痴漢をされてなぜあんなにおとなしいのか、映画では快感の表情さえ浮かべているではないか。あれはウソだ。作りものだ。監督の女性蔑視（べつし）から出たものだ」というのだ。[11]

この記述からわかるように、「痴漢」に対する日本女性の対応は、他の国の女性からは虚偽とさえ映るものだったようだ。ちなみに、この映画はロンドン映画祭、ロサンゼルス映画祭に招待上映された他、東京とニューヨークで同時上映された。国際的に評価が高かった作品である。

今さら説明するまでもなく、明治以降、外国人が日本女性の地位の低さを指摘することは間々あった。とりわけ1910年代以降、国内外で日本女性の地位の低さを問題視する声が高まっていった。Harriet B. Bradburyの*Civilization and womanhood*などがその代表例である[12]。1960年代後半以降になると、アメリカを中心に「ウーマン・リブ」と呼ばれる女性解放運動が盛んになった。そこでは女性に対する差別の撤廃と、差別を行なっている社会の変革が求められた。当然、日本において「痴漢」はこうした運動では真っ先に解消されるべき問題であり、それを許している日本社会や男性中心の社会も変革されるべき対象であった

のだ。

この頃、外国人女性たちの「痴漢」被害状況が『週刊新潮』に特集記事として取り上げられている。この特集は同年2月4日付 *"The Japan Times"* の読者投書欄に東京在住の Patricia Gessner ら5名の英語教師が投稿した *"Despicable Behavior"* という記事が掲載されたのをきっかけとしたものだった。そこには彼女たちの記事の他に、フィンランド出身のファッションモデル、セイヤ・マネキンが東横線で遭った「痴漢」や、『アサヒ・イブニング・ニュース』編集部に勤務するメリー・ウォードの「痴漢」被害、アメリカから上智大学への留学生（名前の記載なし）の丸ノ内線における被害などが載せられており、そこには男性を批難すると同時に、日本女性の従順さが、「痴漢」をのさばらせている大きな要因である、と記されている[13]。

第3章：物言わぬ人々

「痴漢」に寛容な日本社会の特徴の一つとして、周囲の人たちがまったく見て見ぬふりをするということがよく言われる。そうした言説は最初に紹介した新聞記事中にも見られたものであった。それは今日でもよく言われることであるが、イタリアと比較した例があるので、それを紹介しておこう。

1981年、『時の法令』という雑誌に「痴漢を論じてスパゲッティに及ぶ」と題された記事が載っている[14]。この記事の著者は当時上智大学教授だった山口浩一郎である。山口はある日、在日イタリア人留学生の集まりに呼ばれた。その際、比較文化人類学を勉強している女子学生が、日本とイタリアの「痴漢」の違いについて詳しく語ってくれたという。山口が聞いた両国の相違点をまとめたのが表1である。

表１：日本とイタリアの「痴漢」比較
（山口の聞き書きをもとに筆者が作成）

比較項目	日本	イタリア
出没場所	主に満員電車	もっぱら映画館
行動	接触行為	露出
「痴漢」の年齢	中年層	若年層
被害者の年齢	未婚の若年層	既婚の年配層
被害者の反応	黙って耐える	金切り声をあげて抗議する
公衆の態度	声をあげた女性が白い目で見られる	周りの全員が「痴漢」を非難叱責する

先にも述べたように、この記事は山口の聞いたことをまとめたものである。したがって、学術的なものではなく、実証的なものでもない。ただ、あながちまったく実情が反映されていないとも言い切れない。やや図式的で二項対立的な比較ではあるものの、参考になる部分も多いと思うので、ここに取り上げた次第である。

さて、項目を一つずつ見ていこう。まず出没場所だが、イタリアの「痴漢」はもっぱら映画館に出るという。そして露出が多いようだ。「痴漢」の年齢が若い人たちであるのに対し、被害者の年齢は年配層、それも既婚者が多いという[15]。この内、日本の「痴漢」でよく問題となるのが、「中年層」による「痴漢」であり、それも一流企業の社員や大学教授、医者や弁護士などのいわゆる社会的エリートと呼ばれる人の「痴漢」が多いことだ。もちろん、若年層の「痴漢」もいるのだろうが、社会的エリートが「痴漢」で逮捕されれば、社会的に与える衝撃も大きい。要するに、ニュースバリューが高いのである。だが翻って考えてみると、どうしてこれほどまでに日本では「中年層」の社会的エリートによる「痴漢」が多く取り上げられるのに、海外ではあまり問題とならないのだろうか、という疑念が湧いてくる。

この問題に対しては、日本はストレス過多社会であるとか、日本の交通事情のせいであるといった意見が多く見られる。日本男性の性欲に問題があるのだ、といった見方もある。なるほど、日本は他国に比べストレスの多い社会であるかもしれない。だが、他の国でもストレスはあるだろうし、ましてやストレスが本当に「痴漢」と直接結びつくものなのかという問題にはまだまだ検討の余地があるだろう。交通事情に関して言えば、日本の都市部では他国よりも通勤時間が長く、駅と駅との間の距離が長いことが指摘されている。たしかに、こうした交通事情は「痴漢」発生確率を上げる要因となるだろう。ただ、日本の男性の性欲が特殊かどうか、これも疑問の残るところである。

少し余談めくが、この問題を論じた記事を一つ紹介しておこう。山本七平（しちへい）の「痴漢論」である。山本は「痴漢」の条件として「一定の社会的地位をもたなければならない」とする。なぜなら失うものがないといけないからだ。したがって、大富豪や浮浪者たちには「痴漢」の資格がないという。だが、中間管理職やエリート層は違う。なぜなら「痴漢」によって人生の一切を失う可能性があるからだ。彼らは自分が得たものを失う恐ろしさと同時に、得たものだけでは満足できない。したがって、常に欲求不満を何らかの方法で解消しようとしているのだ。つまり、得ようとする積極的な要求と、得ようとすると失うかもしれない恐れとの間に、せめぎ合いが起こると山本は言うのである。さらに、山本は次のようなことを付け加えている。

> 「ラッシュという客観情勢のためそうならざるを得なかった」と自分で納得させなければ、手が出せない。だがその手さえ「得たものを失うかもしれませんよ」と言われれば、途端にひっこめてしまう。[16]

こうした葛藤の中にエリートたちは常に置かれているので、ある時に「痴漢」になってしまうのではないか、と山本は言うのだ。

なるほど、興味深い説ではあるが、これだけでは他の国のエリート層に日本ほど「痴漢」が見られないという事は説明できない。他国ではエリート層の多くが自動車で通勤している事実などを考えて合わせる必要がある。交通手段や都市構

造と「痴漢」発生率には大きな相関関係があるからだ。それについてはまた別に論じる機会があるかもしれないが、いずれにせよ、この文章は日本社会がある種のストレスと葛藤の中にあるという認識に基づいて書かれていることだけは確かなようだ。

さて、本題に戻ろう。ここで注目したいのは、「痴漢」とその被害者以外の項である。日本の女性が黙って耐える傾向にあることは、第2章で見たとおりだ。また少なくとも欧米の女性たちは強く抗議したり、自ら「痴漢」を撃退しようとしたりするようだ。イタリアも同様ということだろう。

より注目すべきは、「公衆の態度」の項である。日本の女性が声をあげた場合、周囲から白い目で見られるという。それに対し、イタリアでは周囲の人たちが「痴漢」を非難したり、叱責したりするというのだ。

直接、「痴漢」に関する言説ではないものの、電車を含む公共の場で周囲の人たちが非常に冷淡であることは早くから外国人に指摘されてきたことだ。たとえば、日本文学・日本文化研究者として有名なイギリス人、ジェイムズ・カーカップが「日本と個性（原題：*Japanese Behavior in a Modern World*）」という文章で次のように表現している。

> 道路や電車やバスなどの乗り物での、粗暴な、しかしとがめられることもほとんどない暴力ざたは、慣習に従わせようとするこれらの圧力に対する抗議ともいえよう。乱暴を働く者をとがめようとする人は、めったに通りがかりの人たちから助けを受けることはない。彼は変わったことをしているのだから、あいつは気でも狂っているんだろうと、じろじろと眺められるだけだ。[18]

日本人の公的道徳がなっていないとの指摘は、公私の別を厳しく求められる社会から激しく非難されてきた。このエッセイの原題からも読み取れるように、彼らの社会では当然形成されているはずの公衆道徳が、「近代化された文明国」の一つである〝はず〟の日本という国には見られないことに、彼らは驚き、そして近代国家としての未熟さを看取しているのだ。ちなみに、第1章で最初に紹介した新聞記事でも周囲の人たちが冷淡であることが書かれていた。

ただし、1985 年 5 月 20 日付『読売新聞』夕刊第 14 面にはフランスのパリで 17 歳の少女が 3 人組の暴漢に襲われたが、乗客たちはみな知らないふりをしたという記事が取り上げられている。その記事には次のような文言がある。

> 日本の都会でも他人への無関心がよく言われるが、パリの場合、その無関心はずっと多い。かつてパリの首都交通公団が乗客に対して行った世論調査で、84%までが乗り物の中で犯罪に見舞われた時、周囲の者は介入してくれないだろうと答えている。[19]

公共交通機関などで周囲の人たちが無関心を決め込むことは、日本の一つの特徴であるといえよう。これはまず間違いないようだ。だが、それが日本だけに見られるものかというと、どうもそうとは言い切れないようだ。西洋諸国といっても、日本と同様、場合によってはそれ以上に他人に無関心な所もあることを、この記事は教えてくれる。

第 4 章：イメージ・ギャップ

1990 年代後半になると、これまでとは少し異なる意見が出てくる。これまで見られたような「男性のモラルの低さ」や「女性のおとなしさ」、それに「周囲の人たちの無関心」の他に、「日本は安全な国なのに・・・」といった文言が見られるようになってくるのだ。具体例を見てみよう。

記事の中に 1996 年 6 月 29 日付『読売新聞』には次のような文言が見える。「Look にっぽん　治安の良さと痴漢の多さ」というタイトルの記事であるが、これはアイルランドから来た国際交流員のアン・フィーランという鹿児島在住の女性による体験記事である。

> アイルランドから日本に来て三年余り。日本は私の大好きな国です。しかし、一つだけ大嫌いなことがあります。東京など大都市の通勤電車、地下鉄の中などで若い女性が痴漢などの被害に遭っていることです。同じ女性として許せません。（中略）身動きができずおびえていても、他の乗客は素知ら

ぬ顔で、だれも助けようとしないのです。東京に住んでいたとき、私も被害に遭いました。[20]

ここまではこれまでに見て来た「痴漢論」と大差ないものだ。ただ、この後が異なる。

日本は治安のよいところで、旅行やビジネスで訪れた外国人にも安全なところだと思っています。電車の中に置き忘れたカメラも出てくるほどです。その一方で、若い女性たちが安心して電車に乗れないとは一体どうしたことでしょう。[21]

彼女は「日本は治安のよいところ」だという。これまで、こうした言い回しは見られなかった。

もう一つ例を挙げておこう。今度は当時、名古屋大学の大学院生だった陳芬慧という台湾の女性の証言である。彼女も帰宅途中に「痴漢」に遭い、悔しい思いをしたようだ。また彼女の友人の何人かも「痴漢」被害を受けたが、「仕返しを恐れて我慢した」という。母国（台湾）では「バスなどでチカンに遭った時や、他人が被害に遭ったのを目撃した時、勇気を出してチカンに注意すると、周りの人も一緒に怒ってくれました。チカン行為を許さないという考えはとても被害者を勇気づけることなのです」と訴えている。そしてこの記事は次のようなメッセージで結ばれている。

日本は治安の良い国ですが、犯罪としては残りにくい、犯罪まがいの行為が野放しにされているような気がします。悪いことは悪いと皆が強い意思を持って団結し、悪質な行為に立ち向かう勇気が必要です。[22]

今では当然のように思われるかもしれないが、日本に「治安の良い国」というイメージが定着したのは、それほど古いことではない。こうしたイメージが形成されたのは、1980年代のことであり、広く定着したのは1990年代のことだからだ。

きっかけは、アメリカの治安をよくするために、日本の警察制度が注目されたことであった。日本の警察制度、それも交番システムが高く評価された。非常に有名なものに、1976 年に出版された David H. Bayley の *Forces of order : police behavior in Japan and the United States*[23] やその新版で 1991 年に刊行された *Forces of order : policing modern Japan*[24]、さらには 1979 年に出版された Ezra F. Vogel の *Japan as number one: lessons for America*[25] がある。これらの書物の中で、日本の交番システムが高く評価され、さらには犯罪率と工業化の間には強い相関関係があるとされ、日本の高度成長は日本の治安の良さ、特にこの交番システムによって支えられたものだと見なされたのである。犯罪率が増加し、経済が不安定だった当時のアメリカでは、犯罪率をコントロールすることがアメリカ経済の成長と安定をもたらすと考えられたのである。その代表的モデルとなったのが、他ならぬ日本であり、それが強調され、喧伝されたことによって、「日本＝治安の良い国」というイメージが形成され、それが流布していったのである [26]。

第 5 章：「痴漢文化」国家・ニッポン

これまで見てきたように、2000 年代以前は、どちらかといえば西洋社会に属する人からの「痴漢論」が多かった。だが、2000 年代の一つの変化として挙げられるのが、日本を「ヘンな国」とする論調であり、その中で「痴漢論」が展開されるケースが見られることである。

そこではこれまで見てきた「痴漢論」とは異なる論が展開されている。それは日本の風土が「痴漢」を育てたという説で、極端な場合には日本が「痴漢文化の国」だと断言されることさえある。

その代表的な論者に李兆忠がいる。彼は中国社会科学文学研究所の副研究員であるが、複数のコラムや著書で、日本の「痴漢」について言及している。内容はいずれもそれほど変わらないので、代表的なものを一つだけ挙げておこう。2007 年 11 月、雑誌『Courrier Japon：クーリエ・ジャポン』が「やっぱりヘンだよ、ニッポン」という特集を組んだ。そこには女性差別（アメリカ）、日本企業の傲慢さ（中国）、女性蔑視（インドネシア）、ユーモアの欠乏（ドイツ）、人並み好き（UK）などが取り上げられている。その中の一つに李の「『性』に寛容なお国

柄が“痴漢天国”を育てた」という文章がある。これはもともと同年に発行された雑誌『世界知識：国際政治・経済』（生活書店）に中国語で発表されたものだが、その邦訳がここに転載されたのである。

その内容を見てみよう。

> 実は日本に「痴漢」が多いのには理由がある。男女の関係におおらかな日本では、好色は悪ではないのだ。[27]

李は日本が好色な国である例として、『好色一代男』や渡辺淳一の小説、天狗の面、浮世絵などを例に挙げている。つまり、さまざまな所に性におおらかな証拠があり、それが現在もなお何の批判も受けずに好まれているというのである。

李は続けて、「留意すべきは日本の女性がこうしたこと一切に寛容である点。このような文化的土壌が日本の「痴漢」を育(はぐく)んできたのだ。」とし、「だから、日本の男性はだれでも『痴漢』の顔を持っており、機会あるごとにそれが表面に出てくる」というのだ。そうした「痴漢」男性の例を列挙した後、李はこの文章を次のような文章で締めくくっている。

> つまり、日本の「痴漢」は日本特有の風土にいまも手厚く庇護されており、告発されるのは運の悪いごく少数に過ぎないのだ。[28]

日本特有の好色文化によって「痴漢」行為が許容されやすい環境にあると、李は断定している。

同様の意見は他の中国語で書かれた書籍にも見られる。ここでは例だけ挙げておくが、李長聲『居酒屋閒話』（遠流出版、2007年7月）や、唐辛子『唐辛子IN日本』（復旦大学出版社、2011年4月）には、はっきりと「痴漢文化」という言葉が使われている[29]。

こうした記事では、日本男性の好色性と、それを許している社会が特に批判対象とされる。

こうした言説が生まれた背景には「女性専用車両」の導入がある。明治末年

に「婦人専用車両」が登場したり、第二次世界大戦直後に「婦人子供専用車」があったりしたが、車内における迷惑行為、とくに「痴漢」防止のために「女性専用車両」が本格的に導入されたのは、2000年以降のことである[30]。この導入が契機となって先のような言説が生まれたのだ。なぜなら、先に挙げたような諸論のいずれもが「女性専用車両」に言及しているからである。つまり彼らは、「女性専用車両」を導入しなければ「痴漢」を防げないような社会を疑問視し、日本の好色的な風土や文化にその原因を求めているのである。もちろん先に挙げたような、数々の日本に対するイメージや情報が定着したという要因もある。ただもっとも直接的な要因は「女性専用車両」の導入であったのである[31]。

おわりに

最後に、本稿で明らかになったことをまとめたいと思う。

・外国人たちによって日本の「痴漢」が問題視され、本格的な言及が行われるようになったのは、1960年代のことである。この背景には、1963年に制定された「観光基本法」の影響があるようだ。

・外国でも「痴漢」は存在するが、その特徴は日本と大きく異なることが報告されていた。

・男性に対しては、まったくその気のあるそぶりも見せないでいきなり「痴漢」行為に及ぶ点が批判されている。初期のころは男性にもっと公共道徳を守り、女性を尊重するような紳士的態度を強く希求するような論調がよく見られた。

・それに対して女性は、「痴漢」に対して自衛措置をとったり、声をあげるような勇気を持つように促したりするような意見が多く見られた。これは男女間差別撤廃運動と深い関係がある。

・周囲の人たちの無関心もよく指摘されることだ。すべてではないが、多くの国では日本とは異なり、周囲の人たちが何らかの対策を取ってくれることが報告されている。

・1990年代になると、これまでの指摘に加え、「日本＝治安の良い国」というイメージとのギャップが語られることが多くなる。これは、1980年代以降に形成された日本イメージとのイメージ・ギャップに起因するものである。

・2000年代以降は、日本の好色的な風土が「痴漢」に寛容すぎるといった批判があったり、時にはそれが「痴漢文化」と呼ばれたりすることがあった。「女性専用車両」という目に見える形で「痴漢」対策が取られた結果、こうした批判が生まれてきたのである。

2010年代、インターネットを検索すると、ほぼどの国の記事にも「痴漢」被害の事例を見いだすことができる。もちろんその被害の質や程度は異なるが、中には日本と同じような「痴漢」被害もあるようだ。これまで女性が被害を訴えにくかった国でも、その実態が明らかになりつつある。今後も引き続き、「痴漢」被害について、世界中の人たちが、そして男性も女性も、さらにはさまざまな領域から、「痴漢」を真剣に議論を粘り強く重ねていくことが大切な作業となるだろう。

学問領域に限るとこれまでは、政治政策分野、都市計画を含む交通に関する研究、パーソナルスペースなども考慮した心理学研究、そして現状把握のための社会学が「痴漢」の問題を扱ってきた。だが、比較文化や日本文化研究からの視点も必要ではないだろうか。「痴漢」の問題というと、人によっては小さな問題だと思う方もいるかもしれないが、その根はかなり深く、相当複雑な問題で、そう簡単に解決できる問題ではないと筆者は考えている。だからこそ、まったく違った観点ないしは領域からの研究が必要だと思う。したがって、今後も比較文化ないしは日本文化という立場から、「痴漢」について真剣に考えていきたいし、最終的には何らかの有効な提言ができればと考えている。

註

1 拙稿「『痴漢』の変容 — 中国から日本への伝播と定着」『日本語・日本文化』第 41 号（大阪大学日本語日本文化教育センター、2014 年 3 月）、同「『痴漢』の文化史 —『痴漢』から『チカン』へ」『日本研究』第 49 号（国際日本文化研究センター、2014 年 3 月）。

2 Wesly K.Johnson, “Bad Manners of Japanese Male”, *The Japan Times*, Aug. 4, 1962, p.44.

3 Steve Rindenour, *”Damaging Male Manners”*, *The Japan Times*, Aug. 13, 1962, p.136.

4 ジョージ・ランバート著・山本あき訳『紅毛日本談義』、毎日新聞社、1965 年 7 月、p.107。

5 同前、p.110。

6 時代はかなり下るが同様の指摘が、アルベルト・ノヴィック『在日アメリカ人 100 人に聞く—日米暮らしおもしろ比較』（三省堂、1994 年 5 月）の中のバーバラという 22 歳の「痴漢」体験談にも見える（p.76）。

7 長谷川順一郎「観光基本法と観光政策の変遷」『横浜商大論集』第 32 巻第 2 号、横浜商科大学、p.107。

8 総理府審議室編『観光行政百年と観光政策審議会三十年の歩み』、ぎょうせい、1980 年、pp.44-45。

9 貞清栄子「調査報告　増加する外国人労働者の現状」『調査レポート』第 65 号、中央三井トラスト・ホールディングス、2009 年春号、p.15。

10 「ぷろむなーど 日本は『内気』を捨てなさい」『読売新聞』1979 年 9 月 17 日付朝刊第 5 面。

11 「ニュース最前線：5 痴漢されて一番しとやかなのはニッポン女性」『週刊明星』第 23 号第 39 号（通号：1142 号）、1980 年 9 月、p.42。

12 Harriet B. Bradbury（1916）*Civilization and womanhood*, Present day problems series, Richard G. Badger,Boston.。この書は 1941 年 5 月にブラッドベリー著・立花士郎訳『女性と文化』（甲子社書房）として出版された。ただし、早くから英語で読まれていたことが、本間久雄『現代の婦人問題』（天佑社、1923 年 8 月）など、諸書に取り上げられていることからわかる。

13 「特集：五人の外人女性が揃って投書した『東京の痴漢』の波紋」『週刊新潮』第 25 巻第 7 号（通号：1241 号）、新潮社、1980 年 2 月。

14 山口浩一郎「痴漢を論じてスパゲッティに及ぶ」『時の法令』第 1124 号、法令普及会、1981 年 10 月、pp.2-3。

15 この差も興味深い点だが、これが「痴漢」だけの問題なのか、あるいはイタ

リアで、一般的に若い男性が既婚の女性に認められることに大きな価値を見出しているのか、その点はまだ確認できていないので、ここでは軽々に論じることは避ける。

16　山本七平「痴漢と小市民」『現代』第 11 巻第 9 号、講談社、1977 年 9 月、p.267。

17　『朝日新聞』1983 年 11 月 1 日付夕刊第 5 面には、24 歳のフランス人留学生が母国から持参した「痴漢撃退用スプレー」を使って「痴漢」を撃退した記事が掲載されている。この事件は、「スプレー一発！フランス娘に撃退されたゴキブリ痴漢」というタイトルで『週刊読売』第 42 号第 48 号（読売新聞社、1983 年 11 月）でも紹介されている。また 1988 年 4 月 8 日付『読売新聞』朝刊第 20 面「エアメール」欄には、ミミ・リンドストロムという 64 歳のスウェーデン女性が、公園の散歩中に出くわした「痴漢」を得意な柔道で投げ飛ばしたという記事が紹介されている。なお、この記事はもともとスウェーデンの日刊紙『アフトンブラーデット』に掲載されたものである。

18　ジェイムス・カーカップ著、三浦冨美子訳『日本随想』、朝日出版社、1971 年 11 月、pp.47-48。原題のエッセイの初出は不明。

19　「パリ版『車内暴力』」『読売新聞』1985 年 5 月 20 日付夕刊第 14 面。

20　「【気流】Look にっぽん　治安の良さと痴漢の多さ」『読売新聞』1996 年 6 月 29 日付朝刊第 19 面。

21　同前。

22　「ニッポン見聞録　卑劣な行為と戦う勇気を」『朝日新聞』1998 年 11 月 5 日夕刊タイム第 1 面。

23　David H. Bayley（1976）*Forces of order : police behavior in Japan and the United States*, University of California Press, Berkeley.、邦訳は新田勇ほか訳『ニッポンの警察：そのユニークな交番活動』（サイマル出版、1977 年 9 月）。

24　David H. Bayley（1991）*Forces of order : policing modern Japan*, University of California Press, University of California Press, Berkeley.、邦訳は『新・ニッポンの警察：日本の治安はなぜよいのか』（サイマル出版、1991 年 10 月）。

25　Vogel, Ezra F,（1979）*Japan as number one: lessons for America*, Harvard University Press, London。邦訳は広中和歌子・木本彰子訳『ジャパン・アズ・ナンバーワン：アメリカへの教訓』（TBS ブリタニカ 1979 年 6 月）。

26　こうしたイメージ・ギャップの例はジパング編『笑われる日本人 — ニューヨーク・タイムズが描く不思議な日本』（ジパング、1998 年 9 月）に数多く見いだすことができる。タイトルからもわかるように、この本は『ニューヨーク・タイムズ』紙に載った日本に関する記事をまとめたものである。編者が、これは偏向した記事だ、と判断したものだけが掲載され、記事内容に対する

批判も同書内で行われている。

27 李兆忠「中国人が見た日本社会 『性』に寛容なお国柄が“痴漢天国”を育てた」『Courrier Japon：クーリエ・ジャポン』第3巻第12号、講談社、2007年11月、p.88。この文章は後に『曖昧的日本人』（広東人民出版社、1998年4月）にほぼ同じ形で収載された。

28 同前。

29 この他、孔健『日本人につけるクスリ』（大和書房、1999年4月）には「痴漢大国」という文言が見える（p.82）。

30 「女性専用車両」の導入経緯などに関しては、堀井光俊『女性専用車両の社会学』（秀明出版会、2009年11月）を参照されたい。

31 その前史として車内や駅内における「痴漢」に関するマナーポスターの掲示が考えられる。ちなみに大阪において「痴漢は犯罪です」や「チカン・アカン」といったポスターが車内や駅構内に掲示されるようになったのは、前者が1995年以降、後者は1996年からのことであった。

Discovery of Japanese“Chikan” by Non-Japanese Peoples

Shigeki IWAI

This paper aims to clarify the characteristics and the social background of the era when the discourse was generated, by analyzing the discourse of Japanese “Chikan” seen by non-Japanese peoples. More specifically, This paper shows that (1) the time when non-Japanese peoples got into question about Japanese “Chikan”, (2) The characteristics and changes of the discourse, and (3) the main social background factor in which the discourse was born.

Analysis revealed the following things.

- Japan’s “Chikan” is regarded as a problem by foreigners, and full-fledged mention begins in the 1960s and onwards. The background of this is the impact of the “Basic Tourism Act” enacted in 1963.
- In foreign countries, “Chikan” exists, but its characteristics were reported to be very different from Japan.
- For men, it is criticized that it suddenly goes to the act of “Chikan” without showing the doubt at all either. In the early years, a lot of tone was observed that strongly wished for gentlemanly attitude to protect men more public morality and respect women.
- On the other hand, many women saw more self-defense measures against “Chikan” and encouraged them to have the courage to raise their voices. This is closely related to the movement to eliminate discrimination between males and females.
- The indifference of the surrounding people is often pointed out. Although not all, in many countries it is reported that unlike Japan, surrounding people take some measures.
- In the 1990s, in addition to the pointing out so far, the gap with the image of “Japan with a good security” is often told. This is due to the image gap with one of the Japanese images formed after the 1980s.
- From the 2000s onwards, there were criticisms that Japan’s erotic enviroment

is too lenient for “Chikan”, and sometimes it was called “Chikan’s culture”. As a result of “Chikan” countermeasures taken in a visible form of “female-only vehicle”, these criticisms were born.

Keyword: Chikan, molesters, non-Japanese peoples, manner in train, female-only vehicle